
メモリー

楓の木の根っこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メモリー

【Zコード】

Z5912C

【作者名】

楓の木の根っこ

【あらすじ】

遠い記憶：掘り出したら一気に僕は涙があふれ出した。僕らは高校生で突然あの日から旅が始まった。僕らの夏は、ユミの母親探しから始まり、小さな恋が始まつた。幼馴染みで女として見ていなかつたユミが、僕の大切な人となつた。でも夏の終りとともに僕らの幸せは消えた。

裸足のまま、素直なままで

「ねえ。裸足で歩こう。」と海岸でコヨイは言った。

夏休みに入つてまだ間もない七月の朝、僕はコヨミと旅に出た。

まだ僕らは、若くて来年からは、大学に通うだらうという時だつた。突然、塾の帰りにコヨミから旅に行こうと言われ、リュックに、服や本、少しだけの金を詰めた。一応、親の引き出しから自分の通帳とハンコも掘んで入れた。

この旅は長くなるのだろうか？親にはさよならを言わず深夜、僕は手紙を残した。

* 母さん、父さん

しばらく友達と受験勉強します。多分、夏休みは帰れないから。

アキトより。

こんな感じで書いたから、多分友達って誰だらうと思つだらう。そして、電話をかけまくり、母さんはあきれるんだ。僕なんて、あまり兄貴より心配されないし、デキソコナイだから、警察になんか捜索願い届けないだらう。

兄貴は大学生だけど今でも、やれ門限とか、車で送り迎えとかなん

やうで、手厚い過保護だ。兄貴じゃなくてよかつたと痛感する。

ユミと僕は同じ高校で、クラスも同じで小学生から仲がよかつた。だけどカノジョじゃないし、ただのクラスメイトだ。ユミは何故か恋愛相手にはならない。近くにいる存在だけど、女として見たことがないのだ。

こうして、砂浜の上を裸足で走りあきやあはしゃぐユミは、可愛いとは思ひ。

恋人じゃないけど、白くて細い腕と小さな口元が僕は好きだった。

「僕たち何処へ行くの？」と不安で聞いた。興味本位でついて行くと決めたが、僕が〇・Ｋ・とだしたのはもっと深い理由があった。

それを説明するにはユミの生い立ちを紹介しなくてはならない。

ユミは、僕と同じ町の中では一番のお嬢様で、彼女の父親が会社とスーパーを経営している。

だからちょっと有名人で、だけど、彼女はつい最近に仏壇からある書類を発見してしまった。これが僕たちの旅のきっかけだ。

ユミはあるひよんのことから仏壇の引き出しを開けて、通知表と思つて開いた紙には小さく家系図が書いてあり、ユミという文字の下には『養子』と書かれてあつたんだと、僕に話した。

たんたんと、顔の表情を変えないで話す彼女だが、僕に話した

後涙を田に浮かべ、言った。

「もう家になんか居たくない」

「旅にでたい。」と

同情した僕は何故かついてこへよ。とこつた。当ではあるのか分からなかつたけど……。

そして、今日になりつゝ田に當てはあるのか聞いた。

彼女の答えは、意外にもあつさつと「あるわよー」だった。

「だけど、まだ迷つてる。そこまでアキトに付き合つてもううがどうか…」

「え？ どうして、夏休みだらうへいよ。あんな家じやコニミを一人にできないし。」と僕は答えると、コニミの田から涙が流れる。

なぜ僕がまた旅についていくようになったかといふ、理由その2を話そう。

彼女が涙を流しながら家に帰れないのは、その金持ちの父親が養子とこう関係と娘にバれてから、肉体的にコニミに迫つてきたからだ。「コニミ、おまえとは親子じゃないと分かつたぶん、ここにいたけりや俺の愛人となれ！ 十八年も可愛いがつたんだから褒美として捧げてもいいだろうが……」と言われたそうだ。

その話のあとに無理矢理、愛撫とやらされたらしい。

いくら養子であれ娘は娘なのにひどい話だ。それから、彼女は僕の塾の出口でわざわざ僕を待つて、全部話してくれたのだ。

荷物を手にし、無表情で魂が抜けた田で僕の名を呼び、「アキト…」と黙りこくり、人影のない道裏でゆっくりと話てくれた。

それから、四時間僕らは、海岸沿いを歩いて隣りの町の駅まで来たところで、ユミがいきなり…

「裸足で歩こう」 と僕の手を引っ張り、砂浜へ行くことになったのだ。

まだ朝の五時だったから人はいない。

行く当てはまだ教えてくれない。きっと長い旅になるのだろう。

はしゃぐ彼女は涙をはらって笑顔だ。久し振りに見た彼女の可愛い笑顔に僕まで笑っている。

彼女の辛い気持ちと不安があるけれど、晴れた時の青空みたいだ。

僕はユミが好きなのかなあと思つ。

ユミは、僕のことビビつ思つてるんだろう?

ゴミは、急に話始めた。「アタシには、小さい時からお姉さんって呼んでるお手伝いさんがいたの…」

確かに僕もなんどか見たことがある。若く見える三十五歳くらいの人だ。

「あのお姉さんって、アタシが中学上がったら居なくなつて、ちょうど弟が…あつ血が繋がつてないけど、ケイタが生まれてから一年した頃に実家に帰っちゃつたの」

そう話すゴミはどこか遠くを見つめる。

「それから何通か手紙が来ててアタシ思つたの、あの入ママだつて、だからあの人家の家に行くの！」

ゴミの顔にはまた笑顔を消す不安が陰つた。

「何処なん？ここからは歩いてなんか行けへんやろ？」

僕は興奮すると何故か関西弁になる。

「うん、松田町つていうところで、隣の県だから電車で五時間…」
僕は迷つた。お金はたった手持ち三千しかない。多分、貯金があるから足りるけど、そこで彼女の母親らしき人物の家に居住われるだろつか？

「僕なんかいつてもええんか？」

ゴミはキッパリ言った。「アキトがいなきやだめだし、いて欲しい。ママには頼んで夏までいっしょにいよー」

それから、僕らは夕方まで砂浜にいて次の日に特急で行こうとした。

夕日が沈む頃僕はまた自問自答した。

『ユミは僕のことなんて思つてゐるのか？』

『でも恋人じゃないよな』

すると、手が急に暖かくなつた。僕の手にユミが手を絡ませてきた。

肩にもたれて来てて、眠りそうな目をしてる。『恋なのか…？』

と心が高まる。

そうだ…僕は好きでユミも好きなんだ。素直にそう思う時だった。
思い返せば、小学生の時、僕がいじめたのも好きだったから。

中学に入つてから、夏休みとか毎日遊んで、図書館で涼んだつけ？
アイスとかジュースでユミの口つけたの僕が勝手に取り上げてたよ
な。間接キスだとなんとか怒られて…

とか思い返していくと、口と口が重なりあつていた。ユミが僕に口づけした。夕日が沈む海辺でユミとのファーストキス。長かつた僕らの友達から恋人への証だった。

そこから、人のいない海に入つて体を洗つて、僕らは一日外で寝た。

手をつなぎながらエスカレートして行く僕らの想い。両手で抱き締めながら、ユミの白い胸に手をつけた。

醜い男に犯された後でユミは平氣沙汰ではないだろう。だけど、僕らは若くて体が無性に反応してしまったのだ。

暖かくなる体、僕は初めてではなかっただけど今までの中でも激しく愛情が沸いた。

ユミのスカートの下も脱がして、僕は彼女に触られながら、お互の手で確かめあつた。

ユミは月明りの中、綺麗に女性として見えた。僕らは必死に悲しさを乗り越えようとした。

無防備な体と体がくっついて、砂が入らないようにタオルを敷いた上でユミと一緒に一体化した。

ユミは月明りの中、綺麗に女性として見えた。僕らは必死に悲しさを乗り越えようとした。

かすかに聞こえる彼女のうなり声が段々弱くなり、痙攣しながらいっぱいの愛が流れた。

外で寝たのは初めてで、無防備なのも初めてだ。これからどうなるんだろうかななんて考えなかつた。それに今があれぱいいと思つた。

僕らの旅はこれから始まつた。長くて、終りが途切れることがないと思つていた。

気付いたら僕は今あの時の海辺で、蝉の音を聞いていた。十年という時をすぎても愛を交わした場所には、まだ古い民宿が老築していくが、やつていた。

ユミを思い出すのには、まだ早いし、もつたいないけど、あの頃の

素直なまま好きだったコニを思い出したい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5912c/>

メモリー

2011年1月15日14時54分発行